

佳作

努力の先に

岩手県立一関第一高等学校附属中学校

3年 芦萱 陽菜

なんとなく、陸上部に入った。

特別な理由があったわけじゃない。「走るの嫌じゃないし、もしかしたら勝手に足が速くなるんじゃないか」——そんな根拠のない期待を抱いていた。部活に行ってもダラダラと時間を過ごし、練習も本気で取り組めなかった。当然、タイムも伸びない。周りとの差は、どんどん広がっていった。練習はきつく、何度も「やめたい」と思った。長期休みでは適当な理由をつけて部活をさぼっていた。

そんな私に転機が訪れたのは中学2年生になった頃だ。

「よし、陽菜さん速くするわ。」

同じ部活の友達が、私のフォームを見直してくれたのだ。少しずつ、走ることが楽しくなっていった。タイムも、100メートルが半年で0.5秒縮まり、さらに半年後にはまた0.5秒縮まった。たった1秒。でも、その1秒が私にとってこれ以上ないほど快感だった。結果が出るたび、「頑張ることって、こんなに楽しくてうれしいんだ」と知った。いつしか、部活をやめたいと思う気持ちも消えていた。

しかし、順調だった日々に影が差したのは、中学最後の大会、中総体の直前だった。シンスプリントという怪我をしたのだ。最初は少し痛いだけだったけれど、日に日に痛みが強くなり、走るたびに悔しさに涙があふれそうになった。

思うように練習ができずに、焦りと不安の中で迎えた大会。前回の大会と同じタイムが、表示盤に刻まれていた。「ああ、こういうものなのか」と、私はどこか冷めた気持ちでいた。しかし同時に、後悔していること、これで終わりだということを認めたくない気持ちもあった。

「もう引退できる。やった。」

口から出た言葉は嘘だった。

でも、陸上部の友達は

「おつかれさま。」

「大丈夫？ 走り、良かったよ。」

と、優しい言葉をかけてくれた。すごくうれしかった。その優しさに触れながら、私は「怪我しちゃいけない」、「自分の体は自分で管理しよう」と強く思った。頑張りすぎるのが、必ずしも良いわけではない。自分の限界を知り、そ

んな自分とうまく付き合っていくことも大切なのだと思った。

このように考えられたのは、友人の存在に支えられたからだと思う。何より、私の「足が速くなりたい」という気持ちに寄り添ってくれた友達が、私の心を支えてくれた。相談に乗ってくれたり、練習に付き合ってくれたり、励ましてくれたり。そんな仲間がいなかったら、私は今でも自分の気持ちと向き合えず、「陸上なんてどうでもいい」という顔をしながら、深く後悔したままだったかもしれない。

また、陸上を続ける中で気づいたことがあった。それは勉強も部活も同じだということだ。どちらもただやるだけでは成果はでない。地道な努力が必要で、その積み重ねが結果につながる。クラスで成績が1番のあの子ども、運動が得意なあの子ども、私を支えてくれた足の速い友達も、陰で死ぬほど努力している。目に見える結果の裏には、見えない膨大な時間がある。入部した頃感じた「周りとの差」は、きつとこういうことだ。勉強も、今はまだ楽しさを感じられなくても、続けていけばいつか「やってよかった」と思える日がくるのかもしれない。タイムが伸びずに嫌になったときも、練習から逃げたくなったときも、乗り越えた喜びは、言葉にできないほど大きかったように。

私は高校でも陸上を続ける。そして新しい自分に出会いたい。タイムを縮めることはもちろん、努力の先に待つ楽しさや仲間と育む友情をもっと深く知りたい。今の私は、もうなんとなくの「あの頃」にはいない。これから、私の前には何度も、壁が立ちはだかるだろう。でももう、私は逃げない。走ることで自分自身をもっと強くしていきたい。そして、今度は私が誰かに手を差し伸べることができるような人になりたい。友達のあの一言がなければ、今もきつと同じ場所で足踏みしていたはずだから。

私は今日も走り続ける。汗は目ににじみ、息は切れる。タイムが縮まらない日だってある。頭では分かっているのに、誰かと比べてしまうこともあるだろう。だけど、そんな私のまま、足を止めずに走り続ける。つらいことを乗り越えた先に、大きな人生の宝箱が待っている。そう信じて、私は今日もチャレンジする。